これまでの暮らしとこれからのくらしを巡る旅

- Vol.6-

人と人のつながりをつくるまち

～Up DATE Cityふくしま

文・瀬イオナ　構成・若林葉子　写真・長谷川徹

福島県の県庁所在地である福島市の北東約10kmに位置する伊達市。
かつて養蚕の町として栄え、現在は高品質のニット生産で知られている。
母なる川と言われる阿武隈川が市を南北に縦断し、平野部は特産品の桃や柿の果樹園が広がる。都市機能と豊かな自然の調和する伊達市は近年、首都圏からの移住者も増えているという。
私たちは伊達市の高子北地区に誕生した街、
『Up DATE Cityふくしま』を取材すべく、一路、北へとクルマを走らせた。



TOYOTA HARRIER Z“Leather Package”
車両本体価格：¥5,410,900（税込）
全長x全幅x全高（mm）：4,740x1,855x1,660ハ
ワーユニット：2,487cc+モーター
駆動方式：E-four（電気式四輪駆動）　燃
料消費率：21.7km/L（WLTCモード）

移住のその先へ

「移住」という言葉を聞くと、何を思い浮かべるだろうか。都会を離れて自然豊かな土地で暮らす。



『Up DATE Cityふくしま』は福島市から阿武隈急行線急行電車で約15分ほど。駅の真ん前から戸建て街区「ソラチエ」の街が広がっている。

定年後に第2の人生を始める。最近ではリモートワークも一般的になり、どこで暮らすかの選択肢は以前よりずっと自由になった。それでもやはり移住という決断には少なからず不安がともなう。地域になじめるのか、学校や病院、買い物環境は十分か？仕事は？そして何より本当にその土地で暮らしたいと思えるか。

移住促進の取り組みが全国の自治体で進む中、地方で暮らすことの理想は語られても、そこでの日常が具体的に想像できる街はそれほど多くはないのではないだろうか。今回訪れた福島県伊達市では、「もしここに住んだら、どんな暮らしが待っているのだろう」―私の関心はまずそこからスタートした。

取材したのは、移住促進プロジェクト『Up DATE City ふくしま』だ。行政（伊達市）と、関係企業や団体で構成されるUp DATE City 協議会、それにパナソニックホームズを中心とする住宅メーカー、そして運営事業者の（株）プレイスメイキングふくしま伊達。これらの官民が一体となって押し進める大型分譲プロジェクトである。

しかし、実際に現地を訪れてみて分かったのは、このプロジェクトは決して住宅や制度の話ではないということ。そこにあったのは、人と人が自然につながる仕組みを、街そのものの中に組み込もうとする取り組みだったのだ。

心地よい地方都市

まずは伊達市がどんなところかを知るため、クルマを走らせることにした。

福島県北部に位置する伊達市は、人口約5万3000人（2026年5月現在）。東京から福島駅までは東北新幹線で約1時間30分。そこから阿武隈急行に乗り換えれば、『Up DATE City ふくしま』までは15分ほど。クルマでも、首都圏から約3時間程度の距離だ。伊達市は思っていたよりずっと近かった。

市内をクルマで走ってみると、生活インフラが充実していることが分かる。幹線道路沿いにはスーパーやドラッグストア、飲食店などが並び、生活に必要なものはひと通り揃う。また現在、大型ショッピングモール施設の開発も進んでいる。

一方、少し距離を走らせると、一面に果樹畑が広がる。伊達市は全国有数の桃の産地として知られ、市を代表する「あかつき」は贈答品としても人気の品種だ。また柿の栽培も盛んで、特に「あんぽ柿」は全国的に有名である。

福島盆地特有の寒暖差と気候が果樹栽培に適しているというが、実際に走ると、その土地の豊かさが風景として伝わってきた。阿武隈川の清らかな流れや、つやつやとした葉を風に揺らす桃畑を見ていると、都市では見えにくくなった季節の変化が感じられる。ここは観光地のような過剰な演出がなく、生活利便施設と自然のバランスがとても心地よい。



伊達市は都市機能と豊かな自然がバランスよく調和している。現在建設中の「イオンモール伊達」は2026年11月ごろオープン予定だ。

歴史が息づく土地

伊達市という名前は、戦国武将・伊達政宗へと連なる伊達氏に由来する。平安時代、伊達朝宗がこの地を治めたことが「伊達」の名の始まりとされ、その後、奥州伊達氏の本拠地として発展していった。梁川（やながわ）には城が築かれ、霊山（りょうぜん）には南北朝時代の歴史が残る。市内を巡っていると、中世から戦国時代にかけての空気が、今も土地の中に息づいているような気がする。

今回の取材では、高子沼、梁川城跡、梁川浅間神社、梁川天満宮、梁川八幡宮、霊山神社を巡った。高子沼には、伊達政宗が豊臣秀吉によって伊達郡を召し上げられた際、金鉱石の精錬所を隠すため沼の底に沈めたという黄金伝説が残る。真偽はともかく、こうした逸話が自然に語り継がれているところに、この土地と伊達家との結びつきの強さを感じる。梁川城跡は、かつて伊達氏の本拠地だった場所である。現在は穏やかな風景が広がるが、ここが奥州の歴史の中心のひとつだったことを思うと不思議な感覚になる。

特に印象的だったのは、梁川天満宮だ。偶然居合わせた宮司の關根さん親子が、伊達氏の歴史を丁寧に語ってくれたのである。ここは昔から伊達家とのつながりが深い場所だと話す姿が、観光ガイドとして整えられた説明ではなく、その土地に暮らしてきた人の言葉として語られると、知識ではなく、物語として自分の中にすっーと入ってくる。

梁川八幡宮は、伊達家始祖の朝宗が鶴岡八幡宮を勧請した神社として知られる。独眼竜政宗が初陣前に戦勝祈願を行った場所でもあり、境内には「政宗さとしの桜」と呼ばれる桜も残る。また、政宗の正室、愛姫の受け渡しが行われた地としても知られ、戦国史好きにはたまらない場所だろう。

さらに足を延ばして訪れた霊山も印象深かった。標高825mの新日本百名山にも選ばれている霊山は、奇岩怪石が連なる独特な景観を持つ。初心者でも比較的登りやすく、約3時間ほどのハイキングを楽しめる。現地ではソロツーリング中のライダーの姿も見かけた。中でも有名なのが「天狗岩」。地元では、その形から「ゴリラ岩」と呼ばれているという。残念ながら、私たちは山に登る時間は

『Up DATE Cityふくしま』のすぐそばに伊達氏の初代・朝宗が築いたとされる高子岡城跡がある。鎮護の神として祀った山頂の亀岡八幡宮は人々を見守るかのように真っ直ぐにこのまちを見下ろしている。



同物件からほど近い高子沼。伊達政宗の金山伝説が残る風光明媚な池。気持ちの良い風が吹き抜け、散歩する人も多い。









古くから山岳信仰の聖地として知られる「霊山（りょうぜん）」は標高825mの岩山で伊達市のシンボルでもある。霊山神社は同地に支城のあった北畠一族が祀られている。

なく、駐車場から見上げるだけだったが、頂上から覗く岩肌が、なんだか巨大なゴリラの顔に見えてくるから面白い。

霊山神社では、南北朝時代に南朝側で活躍した北畠顕家らが祀られている。伊達市には、伊達家だけではなく、日本史のさまざまな層が折り重なるように残っている。「道の駅 伊達の郷 りょうぜん」やジェラートの美味しい「まきばのジャージー」にも立ち寄ってみたが、観光地化されすぎていない、のんびりとした優しい空気が、きっとこの土地の何よりの魅力なのだ。











伊達市梁川町エリアは、伊達家ゆかりの神社として「梁川八幡神社（梁川八幡宮）」「梁川天神社（天満宮）」「梁川浅間神社」の3社が有名。梁川天神社では偶然居合わせた宮司の關根 誠さん（左）と、ご子息である瀧宣の亘さん（右）がこの辺りの歴史などを丁寧に教えてくださった。



現在、発掘調査が実施されている梁川城跡の一画に残る梁川浅間神社。伊達氏の祖、伊達朝宗創建と伝えられている。

また、ドライブとの相性も非常に良い。福島と言えば、吾妻磐梯スカイラインは外せないが、伊達市からは1時間強の距離。また、9月には全日本ラリー選手権「ＭＣＣラリーｉｎ福島伊達」が8年ぶりに開催されるなど、クルマ好きにとっても無縁の地ではない。歴史や自然だけではなく、走る楽しさという視点でも、伊達市は魅力ある場所だ。

未来へ続く街構想

話を冒頭に戻そう。そんな伊達市の高子駅北地区で２０２３年にスタートしたのが『Up DATE City ふくしま』である。伊達市もまた、全国の地方都市と同じように、人口減少や超高齢化という課題に直面している。若い世代の流出による経済の縮小、労働力不足、公共交通の維持困難…、抱える課題は決して小さくない。このプロジェクトは、そうした課題に対する新しい街づくりの挑戦として始まった。

もともとは、土地区画整理事業によって整備された住宅地を活用する一般的な大型分譲計画だったという。ところが総分譲戸数２１４戸という規模もあり、事業化へのハードルは高かった。転機となったのは２０２０年に、（株）プライム ライフ テクノロジーズが事業に合流し、官民と連携した未来志向の郊外型街づくりとして再始動したことだ。

そこで掲げられたコンセプトが「Up DATE City 」。単なる住宅開発ではなく、その時々に必要な暮らしやサービスを更新し続ける街という思想が、このプロジェクトには込められている。

阿武隈急行・高子駅の北側に広がる約14・1ヘクタールの複合開発エリアに、交流施設「Ｕ｣プレイス伊達」を中心として、２１４戸の戸建て街区「ソラチエ」が整備されている。２０２３年10月29日に街びらきの運びとなったが、２０２５年春には認定こども園も開園した。

実際に現地で感じたのは、ここは閉じた分譲地ではないということだった。

その背景にあるのが、伊達市が推進するＣＣＡＣ構想（Continuing Care Active Community）の考え方である。年齢や職業、障がいの有無、性差に関係なく、誰もが役割と居場所を持てるコミュニティをつくる。高齢者だけではなく、子育て世代も、若者も、多世代が循環する街を目指す。農業、福祉、健康、多世代の交流を、この街の中で自然につなぎ、人・もの・産業を循環させることで、新しい地域コミュニティをつくろうとしている。実際、交流施設「Ｕ｣プレイス伊達」には、人が自然と集まる空気があった。単なる公共施設でも、商業施設でもない。地域のリビンググループ的存在なのだと思う。

地方創生という言葉は、ここ数年で何度も聞かれるようになったが、実際には移住者を増やすことだけが目的となってしまうケースも少なくないだろう。だが、『Up DATE City ふくしま』は、移住者を呼ぶ街づくりというより、誰もが関われる街づくりに近いのかもしれない。地域住民も、新しく来た人も、自然に混ざり合えるような仕組みを街そのものに組み込もうと、関わる人たちが試行錯誤している様子が印象的だった。



Up DATE City ふくしま

福島県伊達市で進められている大規模な街づくりプロジェクト「Up Date Cityふくしま」。自治体や地元企業・団体が協力することで地域が抱える課題を解決し、住む人の毎日を充実させる新しい街づくりを目指している。住宅建設や販売に地元工務店が参画できる体制を整え、地元の産業振興や地域経済の活性化に取り組んでいる。「ソラチエ」はこの街の戸建街区の名称。

〔物件概要〕所在地：福島県伊達市保原町高子岡28他 最寄駅：阿武隈急行線『高子』駅徒歩2分～5分 用途地域：第1種低層住居専用地域 開発区域面積：52,940.48㎡ 建ぺい率・容積率：60%／100%（地区計画による） 総区画数：214戸 地目：宅地現在も販売中。詳しくは物件HPへ。



Up DATE Cityふくしま 物件HP

一般の人も利用できるレストランやBBQ・宿泊体験などの詳細はこちらから

プライムライフテクノロジーズの社会課題解決型まちづくりの事例～Up DATE Cityふくしま

はないが、孤立もしない。自然は近いが、不便すぎない。さらにその重層的な歴史がこの土地の魅力をより深いものにしている。

次号では「Up DATE City ふくしま」で実際に行われている、多世代交流を生み出す具体的な取り組みについて、さらに詳しく紹介したい。



同物件の交流館「U-プレイス伊達」の目の前の駅に発着する阿武隈急行線の電車。戸建て街区に住む小さな子どもたちはこの電車を見るのを楽しみにしているという。なんだかほっこりする風景だ。

●瀬イオナ／Iona Hayase
自動車メディアの編集部を経て2024年にフリーランスとして独立。モータージャーナリストを目指して「書くこと」「走ること」を勉強中。レーシングドライバーでありモータージャーナリストでもある中谷明彦氏に師事している。





伊達朝宗が鶴岡八幡宮を勧請した神社だが、伊達政宗が初陣の際、戦勝祈願のために参詣したことで有名。毎年、春に境内のケヤキの木に野生のフクロウが飛来し、子育てを行うことで全国的に知られている。







これまでの暮らしとこれからのくらしを巡る旅

- Vol.7-

人と人のつながりをつくるまち

～Up DATE Cityふくしま

文･瀬イオナ　構成･若林葉子　写真･長谷川徹

前編（Vol.284 ／ 2026年7月発行号）では、都市機能と豊かな自然の調和する伊達市をドライブしながら、この地の歴史や、そこに暮らす人たちとの出会いを中心にお伝えした。
後編となる今号では、この街に「人と人のつながり」を作り出そうとする人たちの姿と、 実際にここに暮らす人のリアルな声を交えて、“これからの暮らしや街づくり”へのヒントを探る。



『Up DATE Cityふくしま伊達』において、“人と人とをつなぐ”重要な役割を担う交流館「U-プレイス伊達」。この交流館の存在は、日本のこれからの街づくりに大きな示唆を与えている。

前編では、福島県伊達市の魅力と、『Up DATE City　ふくしま』が掲げる〝暮らしを更新する街〟というコンセプトや、〝街の中に人と人が自然につながる〟仕組みをつくり出そうとしていることなどを紹介した。

後編では、その取り組みの中心となる交流施設「U-プレイス伊達」を軸に、この街でどんなコミュニティが生まれているのかを追っていく。

つながりが生まれる場所

『Up DATE City　ふくしま』の中心に位置するのが、交流館「U-プレイス伊達」だ。街びらきと共にオープンしたこの施設は、地域住民、移住検討者、子育て世代、高齢者、学生など、さまざまな人が交わる場所として機能している。運営を担うのは（株）プレイスメイキングふくしま伊達である。同社は地元企業を中心に組織され、伊達市から「地域再生推進法人」に指定されている。

この交流館は行政施設のような堅さもなければ、商業施設のようなあからさまな消費空間でもない。実際に交流館の中に入ってみると、ここが用事がなくても誰もが気軽に利用できるオープンな場所であることがすぐに分かる。

施設内にはレストランのほか、ヘルスケアステーション、キッズスペース、テレワーク可能なフリースペースなどが整備されている。ヘルスケアステーションには血圧計や体組成計などが並び、薬剤師や介護士、ケアマネジャーによる健康相談も受けられる。隣接する福祉施設との連携もあり、医療と地域の日常の距離が近い。

交流館の周囲には、福島学院大学の学生がデザインしたコンテナスペース「TATAMI BOOX」やバスケットゴールも設置されている。「TATAMI BOOX」にはたくさんの絵本が収蔵されていて、子どもたちの憩いの場になっていると聞く。また取材時、バスケットゴールの前には学校帰りの生徒たちが自然と集まり、地域に開かれた空気を感じさせた。

〝人と人とのつながりを作り出す〟その象徴ともいえるのが「高子ハロハロマーケット」である。交流館完成前から始まったこのイベントは、現在まで53回開催され、この6月に5周年を迎えた。初めは数十人程度の参加者だったが、現在では1000人規模にまで成長。マルシェ、キッチンカー、クラフト販売、音楽イベント、農業体験などなど。内容だけを見ればよくあるマルシェにも見える。しかし本質は、物を売る場でなく。関係性をつくる場である。出店者同士がつながり、地域住民と移住者が会話し、学生も運営に関わる。自然と次の企画が生まれ、その積み重ねによって新しいつながりが生まれていく。

地方移住で多くの人が不安に感じるのは、地域に馴染めるか、地域の人たちに受け入れられるかどうかだろう。

『Up DATE City　ふくしま』はその入口が非常に柔らかい。祭りやイベントを交流の装置として活用しながら、新旧住民の境界線を少しずつ薄くしていく。その仕掛けがうまく機能しているように見えた。













01 手作り感が温かみを感じさせる街の中のリサイクルボックス。　■号は電気自動車カーシェアリングやシェアサイクルも利用できる。　いざ■ういう時のための防災井戸。　戸建て■区に家を建てるにあたっては地元の工務店も参加。統一感のある街並みを維持しつつ、建主が意匠を凝らした思い思いの個性的な家々が街の風景を彩っている。　街区の中には「健康器■・ストレッチエリア』が整備されている。











01 02 03 誰でも自由に利用できる、レストラン併設の交流施設「U-プレイス伊達」。移住を考える人向けの空家相談窓口もあり、様々な相談に乗ってくれる。　この6■で5周年を迎えた「高子ハロハロマーケット」。多くの〝人と人〟をつないでいる。

地域を支える人々

印象的だった人物のひとりが、プレイスメイキングふくしま伊達で地域活性化や情報発信を担当する菊田瑠香さんだ。伊達市生まれ、伊達市育ち。実はここで働く前、すでに医療業界への就職が決まっていたという。しかし大学時代に「高子ハロハロマーケット」の立ち上げに学生として参加したことで、地域づくりの面白さに惹かれていった。イベント運営を通じ、地域に人が集まる場をつくる面白さを知ったという。

卒業時に運営側から声をかけられ、そのままプレイスメイキングふくしま伊達で働くことを決めた。彼女の語り口からは、この仕事に対する確かな思いが伝わってくる。

現在は移住定住や地域イベント、まちの魅力発信に関するSNS運営を担当し、自ら企画を提案しながらインスタグラムなどで情報発信を続けている。特に若い世代への発信に力を入れており、「だてがーる」という地域発信グループにも関わっている。

興味深かったのは、移住者にもタイプがあるという話だった。「地域で何か新しいことを始めたい人もいれば、自然の中で静かに暮らしたい人もいる。でも、この街には後者の人が比較的多い気がしますね」。確かにここで出会う人たちはみな親切だけれど、押し付けがましくなく、控えめで優しい。移住者を歓迎しながらも必要以上に距離を詰めない。その余白が心地よいのかもしれない。

一方で課題もある。高齢者だけではクルマなしの生活が難しいこと。公共交通機関の本数には限り





交流館の施設の一つであるコンテナ図書館「TATAMI BOOX」。小さな子どもたちが絵本を読んだり、読み聞かせをしたり、豊かな時間が流れる。



年齢や職業、障がいの有無や性差に関係なく誰もが住みたくなる、自分らしく暮らせるまちづくり」を目指し、まちや交流館などの運営を担う、地域再生推進法人プレイスメイキングふくしま伊達のマネージャー鹿股敏文さんと菊田瑠香さん。







「畑のみえるレストラン　Earth」のオーナーシェフ、木幡睦人さん。伊達市のブランド鶏である「伊達鶏」を広くPRしたいと「伊達鶏の会」を発足、会長を務めている。レストランでは地元産を中心とした野菜や伊達鶏のハンバーグなど地元の魅力が溢れるメニューを提供している。

があることなど、地方ならではの現実もきちんと見つめている。それでも菊田さんは「若い世代が戻ってきたくなる街をつくりたい」と語る。県外へ進学や就職で出た若者たちが、結婚や子育てを機に再び戻って来られる場所。それが彼女の目指す伊達市の未来だ。

また、U・プレイス伊達に併設されているレストラン「畑のみえるレストランEarth」も、ここを象徴する場所のひとつだ。オーナーシェフは木幡睦人さん。地元出身で、伊達鶏の会の会長も務めている。店名の〝Earth〟には、「伊達の自然と大地から生まれた食材を活かしたい」という思いが込められている。

可能な限り地元農家から仕入れを行い、伊達鶏も積極的に活用しているという。派手な創作料理ではない。しかし、〝この土地で採れたものを、この土地で食べる〟こと自体に価値がある。

木幡さんの作る料理からはその思いがよく伝わってくる。大ぶりにカットされた野菜をごろごろのせたピザ。人参を丸ごと一本使ったロースト料理。調味料は極力抑えられ、素材そのものの味が前面に出てくる。「野菜って、本当はこんな味がするんですよ」と語る木幡さんの言葉にも、土地への愛情がにじんでいた。「どんな家に住むか」だけでなく「どんな食が日常にあるか」も暮らしの満足度を左右する。このレストランには、伊達市の日常がそのまま詰まっているように感じられた。



沼　匠さん。忙しい毎日の中でも、1日の終わりに街の中をランニングして、気分転換することが趣味のようになっていると言う。いずれはマラソンの大会などにも出場できたら、と話してくれた。

「家」と「街」を選ぶ時代

『Up DATE City　ふくしま』の戸建街区「ソラチエ」に暮らす沼匠さん（31歳）にも話を聞いた。夫婦で公務員として働く中、転勤を機に4年前に伊達市へ移住。住宅購入を考え始めたのは、子どもが小学校に上がる前に生活の拠点を定めたいと思ったからだ。交通の利便性、実家との距離、子育て環境などを総合的に考え、この街を選んだという。特に魅力だったのは、福島市まで短時間でアクセスできることと、インターが近く、高速道路へのアクセスが良いことだった。「地方だけど不便ではない」という言葉が印象に残った。

家づくりでは、家族が自然と顔を合わせられる間取りを重視したという。子ども部屋へ行くには必ずリビングを通る設計にし、庭では家庭菜園を楽しみ、子どもの遊具を自作しているという。実際に暮らしてみると「想像以上に子育てしやすいですね」と話す。近所には同世代の子育て世帯も多く、子ども同士が庭で遊ぶうちに自然と親同士の交流も生まれていく。

また、高子ハロハロマーケットなどを通じて住民同士が顔見知りになれる点も大きいという。「家を買ったというより、この街全体の環境を選んだ感覚」だというその言葉に、この街の本質が表れている気がした。

そして移住検討者向けの宿泊体験施設「Nextプレイス」も興味深かった。1日1組限定で利用できる宿泊施設で、最大6名まで宿泊可能。隣接するU・プレイス伊達に常時スタッフがいるため、



TOYOTA HARRIER Z
"Leather Package"
車両本体価格：5,410,900（税込）
全長x全幅x全高（mm）：
4,740×1,855×1,660
パワーユニット：2,487cc+モーター駆動方式：E-four（電気式四輪駆動）燃料消費率：21.7km/L
（WLTCモード）







伊達市は都市機能と自然が調和し、その暮らしやすさから首都圏からの移住者も増えているという。ここでは移住検討する人のために宿泊体験施設も運営されている。ぜひ、宿泊し、この地の良さを味わって欲しい。







気軽にBBQができる施設が年々少なくなる中、手ぶらでもBBQを楽しめる。地元野菜がたっぷりのったピザは生地から手作りで、驚くほどの美味しさ（BBQとは別料金）。レストランやBBQは一般の方も利用できる。

初めての滞在でも安心感がある。野菜収穫、農業体験、ピザ窯体験、BBQなどを楽しめるオプションも充実している。

私も宿泊し、地元食材を使ったバーベキューも体験した。地域住民が自然に会話を交わす様子や、鳥のさえずり、カエルの鳴き声、夜の安心感など、〝泊まってみないとわからない空気〟を体感できた。移住後の暮らしを具体的に想像できる取り組みとして、完成度が高いのではないだろうか。



住宅街区「ソラチエ」の企画・整備を手がけた浜秋 翔さん。浜秋さんも「高子ハロハロマーケット」をきっかけに徐々にこの街に馴染んでいったそうだ。3年で東京に戻ったが、「人々の優しさ」が特に印象的だったとのこと。

実は、沼さんの両親もこの施設を利用したことで、街の雰囲気を知り安心してくれたという。

「住む＋つながる」街

今回の取材を通して強く感じたことがある。伊達市は単に「住民を増やそう・移住者を集めよう」としているわけではなく、人と人が自然につながれる環境を整えようとしているのだ。人が増えることは重要だが、その前提として、この街を好きになってもらう、暮らしやすいと感じてもらう仕組みづくりに真摯に取り組んでいる。

実際に自分がここで暮らしたらどうだろう、と想像してみた。朝、果樹畑の風景を眺めながらルマを走らせる。鳥のさえずりを聞きながら在宅ワークをし、休日には霊山へ向かってハイキングを楽しむ。高子ハロハロマーケットで顔見知りと会話し、バーベキューを囲みながら交流する。

都市の便利さとは違う。しかし孤立感もない。「地方移住」というより、人との心地よい距離感を取り戻す暮らしに近いのかもしれない。

『Up DATE City　ふくしま』が推し進める挑戦は、これからの私たちの暮らしや地方都市のあり方を考える上で、大切なヒントがたくさん詰まっていると思う。

Up DATE City ふくしま

福島県伊達市で進められている大規模な街づくりプロジェクト「Up Date Cityふくしま」。自治体や地元企業・団体が協力することで地域が抱える課題を解決し、住む人の毎日を充実させる新しい街づくりがコンセプト。住宅建設や販売に地元工務店が参画できる体制を整え、地元の産業振興や地域経済の活性化に取り組んでいる。「ソラチエ」はこの街の戸建街区の名称。〔物件概要〕所在地：福島県伊達市保原町高子岡28他　最寄駅：阿武隈急行線『高子』駅徒歩2分～5分　用途地域：第1種低層住居専用地域　開発区域面積：52,940.48㎡　建ぺい率・容積率：60%／100%（地区計画による）　総区画数：214戸　地目：宅地現在も販売中。詳しくは物件HPへ。



Up DATE City ふくしま 物件HP

レストランやBBQ・宿泊体験などの詳細はこちらから

プライムライフテクノロジーズの社会課題解決型まちづくりの事例～Up DATE Cityふくしま

●瀬イオナ／Iona Hayase
自動車メディアの編集部を経て2024年にフリーランスとして独立。モータージャーナリストを目指して「書くこと」「走ること」を勉強中。レーシングドライバーでありモータージャーナリストでもある中谷明彦氏に師事している。